

幸子の映画

食べある記



★ゲートルは何を食べたか★

今回は人生感をも左右されるほどゲートルに魅了されて帰ってきたドイツの旅をご紹介しますが、今回は見て感じたドイツと想ったより美味しい物に出会えて満足だったドイツの料理と文化をご紹介します。

第二次世界大戦に東西に分断されたベルリンは四十年の時を経て壁が取り除かれ、更に十年を経過して統一議会が開かれた記念すべき「一九九九年四月二十日」私達はベルリンに居ました。新議事堂はガラスのドームを中心にその周りから議会の様子が見られるようになっていて、議会の椅子は濃いラベンダー色、心を落ち着かせながらも灰色の椅子のよりに眠くならない華やかさも持っています。出入り口の枠は山吹色で元

気が出そうな雰囲気、それにしても色使いのセンスの良さには感心します。街中をバスで移動、駅の構内にしても色調にまとまりがあり看板は目立ちながらも、こち良い自然な色使いなのです。ヨーロッパを旅すると何処でも感じる発色の良さ、人種が違うとは言え日本の街の色使いの不愉快さは感じて感心することなどまれでした。でもその旅行を終えた頃から北海道でもマンシヨンの看板にドイツで見た配色が目立つようになってきましたから、デザイナーもやっとなりが付いてくれたのかとほっとしたものです。この頃になるとテレビのコマーシャルの配色、ちらし広告、雑誌のデザインなど気持ちのいい色が使われるようになりま

したが、「この配色見て！」と仕事をやるデザイナーにヨーロッパの雑誌をわざわざ持って帰って見てもらわなくても良いように早くなって欲しいものですね。一時期それぞれの地方の王が繁栄を極めその面影は今も堂々とした風格を持ち使い続けられている王城や美術品の収集にかがいに知ることが出来ます。大勢の団体行動で興味ある美術館に入る事は出来ませんが、今度はゆっくり美術品の鑑賞に出かけたいものと考えています。



フランクフルトソーセージとザワークラフト

国交が合ったせいか、桜や銀杏がドイツ全国に植わっている様子を見ると日本とのつながりが想像できます。「森の国」と言われるだけであって小高い丘全体には木が植えられ、



クッキングキャスター

星澤 幸子

text : Hoshizawa Satiko



アイスバイン

平地は整備された農地や牧草が植えられ荒れた土地などついぞ見なかったのは、隅々まで行き届いた国民の意識の高さではないかと感じてしまいました。早春の新緑の木の葉が美しい街道。ほとんどは畑作と酪農で、主食がパンではなくジャガイモだと言うところに土地柄がうかがえます。料理の皿には必ずたつぷりでシンプルな芋料理がついており、それでお腹を満たす感があります。

代表的料理は地方によって特徴がありますが、日本にも馴染みなのは

もその量の多さ大きさには驚きますが、そのいずれにも必ず沢山の芋料理、ザワークラウトが付いていますので野菜とのバランスは取れているように思われます。キャベツの酢漬「ザワークラウト」は日本のキャベツの千切を塩付けして発酵させ、いろいろな香辛料やワインと煮た物で日本人の口に合うものではありませんでしたので、自分なりに作りましたらこれが美味で！帰ってから随分作りました。

野菜のポタージユが随所で出ま

したが塩気の強いのは閉口しまし

た、ビールを飲みながらなので丁度

良いのだとか……日本なら塩分控

えめが当たり前になっていますが、

キャベツやジャガイモ、りんごを沢

山食べれば体内の塩分とカリウムが

結合し、ビールによって利尿作用を

高めていますので余分な塩分は無理

なく排泄されていて上手くできてい

るものです。伝統料理と言うものは、

北海道でも同じことが言え、ニシン

漬けと粉ふき芋は良く合います、塩

辛いものが好きな傾向にあります

が、ジャガイモやりんごを食べてい

れば問題は無いはず。そこで採

れたものを、バランスよく食べてい

れば病気になるずに済むでしょう。



アスパラのオランダーズソース

身土不二(しんどふじ) 医食同源(いしょくどうげん)を叶えた食事を感じました。春とあって、ベルリンのホテルで戴いたホワイトアスパラガスの立派で美味しかったこと！帰ってきて真似しましたがアスパラの質が違うらしく同じような味が出せませんでした。テイクアウトのお惣菜屋さんには、沢山の料理が大きなバットに入っていて量り売りされていて実に美味しいう、レストランも良いけれど、好みのものを買って公園で広げてワインと飲むのは楽しいでしょうね。街角では、小さ目のパンを切り開いて焼いたフランクフルトソーセージをはさんでケチャップやマスタードをつけて食べるのが流行のようでした。ドイツ人は、

思いのほかワインを沢山飲むのだそうでビールの消費は日本人のほうが多いのだとか……。

大戦でそのほとんどが戦災に遭いながらも遺産としてきちんと修復しながら使い続け、自動車産業の国でありながら排気ガス臭くなく、ラッシュも無いドイツ。環境に配慮しエネルギー使用を半分はまだ引き下げようとの政策がなされている国ドイツ。ゲートの人を愛し精力的に誠実に生きた思想は今も引き継がれ、「ようこそ」とゲートハウスの玄関にあるように何時でも心地よく迎えてくれる美しい国ドイツ、北海道が見習うことの多いことも感じたドイツの旅は今も私の中で生きています。

幸子の

映画食べある記